

---

# 夏の思い出

坊

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

夏の思い出

### 【Nコード】

N2103P

### 【作者名】

坊

### 【あらすじ】

「僕」の幼い頃の思い出です

最近まで忘れてたのだが昔僕には姉が居た  
たしか名前は夏目

まだ小さかった僕はなつお姉ちゃんと呼んでた

お姉ちゃんは僕とかなり年が離れていたけど  
いつも僕のことを可愛がってくれて  
僕はそんな優しいなつお姉ちゃんが大好きだった

でも僕の両親は僕がお姉ちゃんと遊ぶのを酷くいやがった  
どうしてか理由を聞くと

お姉ちゃんが「人とは違うから」  
とそう言った

お姉ちゃんは生まれつき耳が聞こえないらしく  
だから喋ることもできないらしい  
だからきつと両親はお姉ちゃんと話すのをいやがるんだと思っていた

僕も小さな頃言葉を覚えるのが遅く  
当時片言しか喋れなかったから  
お姉ちゃんと会話するのに困ることはなかった

お互いに手振りや視線を交じわすだけで  
僕らの会話は成立していた

お姉ちゃんが時折見せる天使のような笑顔が僕は大好きだった  
ある日僕が幼稚園から帰ってくると

飼っているハムスターが死んでいた

僕は死ぬということがどうゆう事かわからなくて

「ぼんすけはどうしてうごかなくなっちゃったの？」

と母親に聞いた、すると母親は

「さあね、もう買ってあげないからね」

とだけ言った

相変わらず死がどうゆう事かわからなかったけど

もうぼんすけと遊べないんだと思うと

僕は急に悲しくなってきた

悲しくなった僕は母親の目を盗んで

お姉ちゃんの部屋に行った

お姉ちゃんの部屋行くのを母親に強く禁じられていたので  
かなり勇気がいったのを覚えてる

お姉ちゃんはぼんすけを見ると

とても悲しそうな顔をして

一緒に庭についてくるようにと

身振りで僕に知らせた

お姉ちゃんは穴を掘ってぼんすけを埋めようとしたので

そんなことをしたらぼんすけがかわいそうだと僕は思ったけど

お姉ちゃんがぼんすけをいじめるはずがないので

僕は黙って見ていた

穴の中にぼんすけを置くとお姉ちゃんは

ぼんすけの大好物だったひまわりの種を取り出し

それを一つだけぼんすけの上に乗せた

きつとぼんすけのお腹が空かないようにだと思った  
やっぱりお姉ちゃんはおんすけをいじめるはずなかったんだ  
その上に土をかぶせながらお姉ちゃんは泣いていた

その時僕は少しだけ死の意味がわかった気がした

その夜お姉ちゃんは僕を一晩中抱きしめて一緒に泣いてくれた

次の日の目が覚めるとお母さんが怒っていた

僕が勝手にお姉ちゃんの部屋に入っただのがバレたからだ

お母さんはお父さんと一緒になってお姉ちゃんを殴った

僕はやめてくれ、やめてくれて思ったけど

まだあの頃に僕にはそれを止める力すらもなかったんだ

僕はお姉ちゃんの手を取って外に逃げることにした

後ろでお母さんが何か叫んでいたけど

僕は恐ろしくて振り返ることもできなかった

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2103p/>

---

夏の思い出

2010年11月29日08時49分発行